The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ルードルフ・A・マックリール『ディルタイ一精神科学の哲学者』
Author(s)	溝口, 宏平
Citation	カンティアーナ. 1995, 26, p. 99-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66734
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

ルードルフ・A・マックリール『ディルタイ——精神科学の哲学者』

大野篤一郎・田中誠・小松洋一・伊東道生訳（法政大学出版局〈叢書・ウニベルシタス　四一四〉、一九九三年十二月刊）

溝口宏平

ディルタイの未完に終わった『精神科学序説』の第二巻に相当する草稿が、一九八二年ディルタイ全集第一九巻（『人間と社会と歴史についての諸学の基礎づけ』）として、H・ヨーアッハとF・ローディによって公刊されて以来、いわゆる「ディルタイ・ルネッサンス」と呼ばれるディルタイ再評価の運動がたかまってきたことはよく知られている。こうした再評価の機縁は、たとえば草稿冒頭の章で取り上げられている「現象性の命題」（「一切は意識の事実であり、したがって意識の諸条件に従う。」）に見られるように、ディルタイがフッサールの現象学が切り開いたとみなされる問題領野のうちにすでに踏み入っていたことが明らかになり、それにともなってディルタイの思惟のもつ独自の可能性と問題圏の広さとを見なおす必要が生じてきた点にある。いいかえれば、それは、現代解釈学の潮流のなかでは主流のようにみなされるハイデガー、ガダマー流の現象学的・存在論的な解釈学の前段階にディルタイを位置づけようとする傾向に反対して、ディルタイの精神科学の基礎づけのモティーフと彼の生涯にわたるその展開の過程を、それ自身の内的可能性から再解釈し、統一的な意味と意義とを与え直そうとする試みの台頭であったともいえよう。もっとも、ディルタイ思想の独自性に光をあてようとする動きは今に始まったわけではなく、すでにミッシュ、

ボルノーと続くいわゆるディルタイ学派の中心的な問題意識を形成していたものでもある。しかしそうした動きの中にあっても、ディルタイの思想の評価についていえば、たとえばボルノーの極めて優れた著作『ディルタイ――その哲学への案内』（原著初版一九三六年刊）の場合もそうであるように、主として後期思想に属する解釈学に記述と評価の力点が置かれ、心理学や美学に関する論究をどちらかといえば過渡的ないし傍流の思想とみなす傾向があったことは否めない。しかしこうした評価の仕方は、結果的には現代解釈学のディルタイに対する評価の傾向に合流するものであり、その点では一面性をなお免れていないということになろう。それに対して、ここに紹介するマックリールの作品は、従来軽視される傾向の強かったディルタイ初期の心理学や美学についての著作に解釈の視点を定め、むしろそこから後期の解釈学的思惟に光をあてることによってディルタイの思想を全体として有機的統一的に捉えようとする点に特色を有している。マックリールは、「まえがき」の中で、自らの企図を要約して次のように記している。

「ディルタイの初期の心理学的著作を彼の後期の解釈学的歴史的著作から切り離そうとする普通の傾向に逆らって、私のこの研究はそれらの著作の本質的な連続性を示そうとする。ディルタイの思想のこれらの基本的様相を結びつけることによって、彼の概念の豊かさと彼の見解の全体的な整合性とが判断されるべきである。このことを念頭において、私は彼の美学的著作の中心的重要性に賛成し、彼の歴史理論に対する美学的著作の持つ意味――それらの多くはカント的な意味であるが――を探る。」(xv-xvii)

このような論究の企図とその綿密な研究の行程をみる限り、この作品は、初版の刊行が一九七五年でありかつ英語圏の作品であるにもかかわらず、内容のうえからいって、いわゆる「ディルタイ・ルネッサンス」の嚆矢となるものであり、その中心的な役割を果たす作品とみなしても差し支えないであろう。なお、一九九一年に出版されたドイツ語版で付加され、本邦訳でも訳出されている第二章（一九九二年出版の原著第二版では「第二版へのあとがき」として付加された）では、原著初版刊行後に出版されたディルタイ全集の第十九巻、二〇巻が取り上げられており、その点からも、本書はディルタイ再評価の動向を知るうえで

の恰好の書となっている。

本書は序論及び本文を構成する四部（通算十一章）から成り、註をも含めると五〇〇頁余にもわたる浩瀚な書であるため、要約は容易ではない。そのためここでは、本書の根幹をなすディルタイの美学と心理学に関する分析と解釈のうちから――実のところ本書の大部分がこれらの問題に当てられている――、特筆すべき見解を二、三取り上げるに留めておきたい。

まず、本書を独創的なディルタイ哲学の研究書に仕立てあげているライトモティーフとして、ディルタイの生涯の課題となった「精神科学の基礎づけ」の試み全体を「歴史の美学（感性論）」の構想として捉えなおそうとする著者の目論見を指摘しておかねばならない。「歴史の美学」とは、ディルタイの歴史認識の可能根拠の解明の構想（歴史的理性批判）を、カントの『判断力批判』で取り上げられた美的判断の能力、とりわけ反省的判断力の機能と構造への反省を通して、「歴史的判断力批判」（二八一頁）として特色づける試みを指している。それは、特殊から全体（普遍）へと向かう反省的判断力を、具体的個別的出来事を相互の作用連関のうちで捉えようとする歴史認識のうちに、その可能根拠として位置づけようとする作業であり、その意味で歴史認識論でもある。言い換えれば、カントが『純粋理性批判』でなした、自然認識の直観的条件を問題とする「超越論的感性論」に対して、歴史の美学は、時間的発展としての歴史を捉える想像力の諸条件を問題とする「歴史の感性論」なのである。

こうした「歴史の美学」という性格づけは、ディルタイのなした詩的想像力についての美学的分析と記述的分析的心理学との内的連関に光をあて、両者が精神科学の基礎づけに対して果たす本質的な意義と役割とを明らかにする。その際、注目すべき点は、マックリールが、想像力の本質的性格を総合の働きのうちにではなく、むしろ分析の働きのうちに、彼の語でいえば「分化・明確化（articulation）」の働きのうちに、見いだしている点であろう。歴史認識の対象となる生の連関は、われわれには初めから全体として与えられているのであって、それゆえ、部分から帰納的に全体を構成していく総合化の働きではなく、全体の分節化のうちで部分を全体との相互的な連関にもたらす想像力の働きこそが、歴史認識においては決定的な意義をもつことになる。そのような分析的な想像力によって、生をその全体性との連関のうちで具体的に捉えることを可能にする「類型化」も可能にな

るのである。

想像力のこのような分析的機能の強調は、また同時にディルタイが初期に構想した記述的分析心理学に対しても、精神科学の基礎づけとしての正当な役割を与えなおすことになる。ヴントに代表されるような説明的・自然科学的心理学とは異なって、生の全体の分析に従事するディルタイの心理学は、優れて歴史認識の基礎理論としての役割を果たすものとなる。それゆえマックリールは、ディルタイの心理学を決して過渡的な思想とみなすのではなく、たとえ表面に現れることはなくとも、後期の解釈学の思想においても基礎を形成しているものとみなしている。そして、ディルタイによって与えられた、精神科学に体系的統一を与えるものという心理学の役割を強調するのである。このようにして、マックリールは、想像力、心理学、反省的判断力、そして解釈学を全体的な連関のうちで捉え、それぞれが相互の連関のうちでディルタイの精神科学の基礎づけという構想を支え形成するものとみなすのである。

こうしたマックリールのディルタイ解釈の成果は、単にディルタイ研究という限定された領野に対してのみならず、現代の解釈学一般の可能性を考えるうえでも極めて示唆に富むものである。とりわけ想像力及び判断力の精密な機能分析及び記述的分析的心理学の再評価は、解釈学のさまざまな具体的局面の構造分析に際しての視点と現象への接近方法を示唆してくれることと思われる。もっとも評者のようにハイデガー及びガダマー流の存在論的な解釈学の立場に近い者からすれば、生や歴史の概念への反省がほとんどなされていないことに不満が残らないではないが、他方で、ハイデガーやガダマーのように存在論的な問題領域にあまりに強くシフトしてしまうと、理解や解釈の具体的、現実的な構造への眼差しが欠落し、彼ら自身が実際の解釈に際して従っている規範や諸条件、あるいは駆使している技法が無批判なままに放置されるという問題があることも否定できない。その意味でも、本書は、著者が批判の的としているハイデガー、ガダマーらの存在論的な解釈学的哲学にとっても啓発に富むものというべきであろう。

最後に、このような大部にして、どちらかといえば地味で少なからず読解の努力を要する本書を邦訳された翻訳者の方々に対

して、敬意の念を表しておきたい。哲学の精神は、こうした地道に歩まれる労多き営みのうちでこそ成熟していく、ということを評者も肝に銘じておきたいと思う。

なお、著者のマックリール氏は、一九三九年ベルギーに生まれ、現在アトランタのエモリー大学教授、現在刊行中の英訳版ディルタイ選集の共編者でもある。一九八九年来日し、各地で講演し、大阪大学でも講演会がもたれたが、評者は残念ながら参会する機会をもちえなかった。

（大阪大学文学部教授）